

青島草紙
せいしやうそうし

八重代かりす
やえしろ

*起

自分が生まれた日に岐阜県で殺人未遂事件があった。

被害者は就寝中の夫婦が二人。加害者はその夫婦の息子を含む三人の少年。ちなみに全員高校一年生。

ありふれた話だ。勿論、被害者二人にとっては、たまったものではあるまい。何しろ、寝ている最中にいきなり刃物で刺されたのだから。実に理不尽極まりない話だ。しかし、犯罪とは往々にして理不尽なものである。そして、人が一億も蠢いているこの国では、そんな理不尽が毎日のように新聞の一面を賑わせている。

そんなありふれた話に着目したのは、少年たちの犯行動機が気になったからだ。

どうせ、ろくなものではないと思っていた。親の力で飯を食っている人間が、その親を殺すなんて馬鹿馬鹿しい話だ。よっぽど酷い虐待を受けていたのか、さもなければ、その後、自分たちがどうなるかを想像できない愚か者に違いない。

——実際、その少年たちは愚か者だった。

事の始まりは、主犯格の少年が中学一年の時に不登校になったことだろうか？

そして、その少年は不法投棄された廃車の中で日々を送ることになった。そして、その生活に『仲間』であり『友人』である他の少年たちも合流する。

少年たちはその廃車の中で、共に語り、共に遊び、共に時を過ごした。具体的にはテレビゲームやサバイバルゲームで暇を潰していた。学校にはあまり通わなかったが、しかしそれでも、義務教育は彼らを進級させ、少子化は彼らを進学させた。

そんな中、少年の一人がある少女に恋をした。だから、少年たちはその少女も自分たちの仲間に入れようと考えた（この部分を読んだ時は『うわあ』という声を抑えるのに必死だった）。

しかし、その少女を如何にして仲間に取り入れるかが難しい。そもそも、その少女は少年たちに関わろうとしなかった。

だから、少年たちは悩んだ。

そして、考えついた。その少女は『何者か』に監禁されており、自分たちはそれを助ける秘密組織の一員なのだ。

（少女が己の判断で、少年たちに関わろうとしなかったのなら、彼女は実に賢明だったといえる）

だが、そこまで話が進むと少年たちの中にも「では、『何者か』とは、何者だ？」という疑問が芽生えてきたらしい。

だから、さらに考えた。

自分たちで彼女の家族を皆殺しにして、その後で、自分たちで彼女を助ければいいのだと。そうすれば、きっと彼女は自分たちの仲間になってくれるはずだと。

それに実のところ、自分たちは平凡な中学生ではない。不登校という意味で非凡な存在なのでもない。本当の自分たちはある『秘密組織』の一員なのだ。その組織の本部はニューヨークにあり、その支部が名古屋にもある。自分たちはそういう国際的で大規模な秘密組織の一員なのだ。だから、この『ミッション』（笑↑少年たちはそう呼んでいた）を成功させれば、組織から、報酬も貰える。その上、少女を仲間に取り入れられるし、一石二鳥ではないか……と彼らは考えたのである。

真に頭が痛い話だ。最早、どこから突っ込んでいいのかも、わからなくなってくる。彼らの取調べをした警官はさぞや苦勞をしたであろう。

——最初に出てきた少女を監禁している『何者か』はどこへ行った？ それにどうして、その『ミッション』で、金が貰える？ その『ミッション』で、その『秘密組織』が何か得をするのか？ 大体、少女の家族が『秘密組織』に狙われる理由はどこにあるのだ？

また、仮に、そういう国際的で大規模な秘密組織が実在したとしよう。たしかに、犯罪者のネットワークは侮れない。そういった組織も実在するかもしれない。だが、その場合、

——何故、平凡な高校生に声をかける必要がある？

という問題に自然とぶち当たるだろう。しかし、彼らの『ミッション』への意気込みは高く、些細な疑問には構っていられたらいい。彼らは夜遅くまで、その『ミッション』について語り合った。

ところがそれを邪魔するものが現れた。そう、例の被害者夫婦である。とはいっても、老夫婦は『ミッション』や『秘密組織』を知っていたわけではない。少年の一人——すなわち夫婦の息子が夜遅くまで出歩いている事を善しとせず、厳しく躰け直そうとしたのである。

このままでは『ミッション』に差し障りが出る。そう判断した主犯格の少年が『ミッション』に先行して、夫婦を排除しようと計画する。

かくして、岐阜県で殺人未遂事件が発生。元が妄想混じりの杜撰な計画だけあって、警察はあっさり少年三人を逮捕。かくして、夫婦は大怪我をし、その息子を含む少年たちは少年院行きとなった。

一説には彼らが夢中になっていた遊戯ゲームには、よく似た『設定』があったらしい。

いずれにせよ、愚かな話だ。実に愚かな話だ。あまりに愚かな話なので、当時は結構大きく取り上げられた。不謹慎ながらも、娯楽性の高い事件だったので、この記録にも多少の脚色が加えられているかもしれない。

——しかし……。

灰色の空の下、ふと思う。

——しかし、自分と少年たちの間にどれだけの差があるのだろうか？

二宮朱乃はふと思うのだった。



髭もじゃの男を前に、若い娘はくるくると回った。

「ほら、ほらー」

「……………」

物言わぬ男を前に、若い娘は髪をかき上げた。

「ほらー」

「……………」

口を開かぬ男に、若い娘は「ぬうう、ならばっ！」と気迫を込めた。そして、ニヤリと歪んだ笑みを浮かべる。娘は腰を曲げ、身体を屈めた。スカートをつまみ上げ、ゆっくりとその太腿を露にしていく。

「ほーらっ！」

「やめんか、はしたない」

男は娘を蹴り倒した。

舞台はあるマンションの一室——。

男の名をヤヒヤーといい、娘の名を呉羽くれはという。

煎茶をズズとすすり、ニューヨーク・タイムスに目を通し、ヤヒヤーは着める。

「いい歳して子供みたいに興奮して」

しかし、呉羽はまったく反省の色を見せなかった。

「だって、セーラー服よ。セーラー服」呉羽はその身に纏ったセーラー服を指差し、小首を傾かしげて問いかける。「そそらない？」

「……よくわからんが、水兵服セーラーがそんなにいいのか？」

「うん、あたし、ずっとブレザーだったしさ」

微妙な齟齬には気を留めず、呉羽は心底嬉しそうにはしゃいでいた。

「この上品な白いハイソックスに黝い膝丈ジャンパースカート、手首の白い二本線と胸元の校章がきらりと眩い紺のセーラー服、そして、同じく紺に白の二本線が入ったこの可愛らしいタイ……もう、文句なしのセーラー服ね！」

呉羽は拳を握り、己が身に纏っているセーラー服の素晴らしさを熱弁し、力説する。

だが、ヤヒヤーは「動きづらくないか？」と素朴な疑問をぶつけた。

「んー、どつちかつていうと、スカートにフアスナーが欲しいかな。でも、いいの。何故なら、これであたしは女子高生だから。そう、完膚なきまでに女子高生なのよ！」

「この国ではそんなに女学生が珍しいのか？」

「ふん、そこいらの雑誌でも見てみさない」

「……俺は日本語などほとんど読めんのだが……」

「ならば、傾聴なさい——この国で女子高生といえば、『花の』が枕詞になるほどの存在なの。それは子供と大人の端境に瞬く刹那の光であり、人生の中でも最も彩られた鮮烈なる輝きなの。その限られた時間ゆえにこそ煌く、繊細にして秀逸なる魅力は万物を凌駕し、万象を超越するの。すなわち、女子高生とは期間限定ながら、あらゆる階級の頂点に君臨するモノなのよ……」

呉羽は声も高らかに己の主張を謳い上げた。一方のヤヒヤーは何やら考え込み始めた。

そして、彼は「思うのだが」と前置きし、その髭に覆われた口を開いた。

「それは女子高生なるものに価値があるのではなく、現役女子高生なるものにこそ、価値があるのではないか？」

呉羽はヤヒヤーを蹴り倒した。

『館山 呉羽（たちやま くれは）——上記の者は本学の学生であることを証明する』

蹴ったり蹴られたりしながら、マンションを後にした娘——すなわち館山呉羽は——通学路を歩きながら、己の写真と氏名が併記されている学生証を凝視していた。

思わず、独りでニヤニヤしてしまう。何しろ、そこにある顔写真の出来映えにはかなり気を使った。そして、その成果は十分上がっているのだ。

写・っ・て・い・る・の・は・い・か・に・も・十・代・中・盤・と・い・つ・た・一・人・の・少・女・。

ようやく、伸び始めてきた日に焼けた髪。これを再び後頭部で高く束ねたのは、やはり正解だった。昔と同じく《仔馬の尻尾》^{ポニーテール}として、ふさふさ揺れてくれる。よく『髪が長いのに、そんなに高く結ぶと重さで頭皮痛めない？』と忠告されるが、そこそ、呉羽の唯一で最大の天稟である。頭皮に限らず、肉体の頑強さにはちよいと自信があるのだ。

——だから、これがあたしの一張羅！

後ろから見れば可愛らしい。側面からは日に焼けた髪がきりりと引き締まっている点が強調される。後ろに髪をかき集めた分、額が広く見えてちよつと間抜けだが、笑みを浮かべてみれば、それも魅力に変わるはずだ。

元々、呉羽の顔立ちはそのほど整っているわけではない。目も鼻も口も唇もすべてが凡庸だ。

それだけに表情美で勝負するしかなく、また、それが容れられる造形でもある。昔は隣に並ん

だ幼馴染の美形っぷりに、ちよつとばかり劣等感を抱いたものだが、今とはなつては

——あたしだって、捨てたもんじやない

という健全な自信が湧いてくる。

そうそう、勿論、顔写真とはいえ、実際には胸元の辺りまで、写る羽目になる。したがって、もはや体の一部になつている首筋の絆創膏の下には、きっちり着用している件のセーラー服が映々しく写っており——なんというか、こう、『あたしは女子高生です！』という雰囲気が写真からもひしひしと伝わってきた。

……完璧だ。どこからどう見ても、完全無欠の女子高生ではないか。あの馬鹿が変なことをほざいたからって、ちよつとでも不安になった自分は大馬鹿である。

そんな風に一人で安堵していると、周囲に気配が満ちてきた。呉羽は慌てて己の学生証を隠す。視認せずとも、その正体は察せる。呉羽は登校中で、かつ、もう学校までは残りわずか。つまり、ここは徒歩通学の学生達がそろそろ集まってくる地点なのだ。さすがに通学路で学生証を見ながら、ニヤニヤしている姿は恥ずかしい。まして、その中にこの先、級友となるかもしれないものが混じっているとすれば、なおのこと。

少し視線を上に向けると高い人造石の塀が呉羽の目に止まる位置にあつた。

——うんうん、あれこそ清らかな学園を汚れた外界から隔てる不壊金城の壁……あれが見えるとなると、残り三百メートルを切っている。学生が集まってくるのも必然ね。

学園までの道を地図で読んでいたので、ついそんなことを考えてしまう。しかしまあ、巧妙な作りだと呉羽はつくづく感心した。元々、住所の時点で『ああ、郊外の上流階級向けになっているのか』と納得するような立地だし、あの塀やその奥にある校舎も外部からの進入、観測を極力抑制する構造になっている。

無理もない。今から呉羽が通う私立壱窟学園高等部はいわゆる『名門お嬢様学校』である。すなわち、『今時こんなお嬢様がいるわけねーだろ』てな感じのお嬢様がごろごろいらっしやる人外魔境の地なのだ。

——いや、今だからこそ……か？

呉羽は中学時代からの腐れ縁である海内七美の主張を思い出していた。

彼女曰く——とうに分解再生産の時代を過ぎている日本は自由主義、貨幣数量説に傾かざるをえない。そうなれば、二極化が大人の経済環境だけでなく、子供の教育環境をも侵食するだろう。このギリギリの時期に公立中学を卒業できる自分達は『幸せな中流階級』最後の世代かもしれない。無論、格差の拡大を抑える動きもある。が、何事も時勢には抗い難い。今後、初等及び中等教育は（下手をすれば、高等教育も）『下層階級の子女が通う低水準の教育機関としての公立学校』と『上層階級の子女が通う高水準の教育機関としての私立学校』が明確に二極化していくかもしれない——らしい。

当時の呉羽は彼女の主張を『……まあ、電波な事を言っているな』と聞き流していた。

だが、実際にこの塾けいこつをみるとなんとなくわかってきた。

つまりは、ここが『上層階級の子女が通う高水準の教育機関としての私立学校』なのだろう。ちらちらと左右に目線を走らせてみたが、周囲一带に柄とか頭とかの悪そうな奴は一人もない。むしろ、いかにも知性と品格を兼ね備えた上流階級のお嬢様っぽい少女で、少女で、少女で……。

——お、おとおおーっ……！！

呉羽にしては珍しい思索は吹き飛び、感動がその身が震えていた。

何せ、右も左も女、女、女。

しかも、視界に入っているのはすべて十代の少女である。これまで、呉羽は学校といえ、公立共学しか経験していない。しかも、ここ数年に限れば、むしろ、三百六十度男、男、男な環境だった。それだけに、このオンナノコオンナノコした空気に包まれるだけで頭がぐらくらくしていた。

「いやあ、眼福、眼福。わざわざ、高い金払った甲斐があつたわ……」

入学試験の時もそうだったが、思わず嘆息し独白してしまう。

ここ私立塾けいこつはお嬢様系名門女子学園である。当然学費はかなり高めで——この学園は中高一貫どころか、幼稚園から、大学まで備えてあるが——この高校を卒業するだけでも五百万は覚悟しなければいけない。本音を言えば、いかに豪放磊落な呉羽といえども未だに迷っている。

何せ、五百万、日本円で五百万である。

呉羽たちはこの前の東・トルキスタンの仕事で大金を手にした。その気になれば、五百万どころか、一千万でも、一括払いできる。しかし、貯蓄が無限なわけではない。無駄な出費は避けるべきだ。そして、呉羽にはこれが無駄な出費でないと言い切れない。今更、高校に通うことへの疑念はやはり大きい。勿論、二人の共同資産たる口座の金を引き出すことにはヤヒヤー（すなわち今朝蹴ったり蹴られたりしていた髭もじやの男）の賛同も得ている。しかし、ヤヒヤーのこれからを考えれば、金はいくらあっても足りないだろう。

なるほど、現在、呉羽はヤヒヤーに一方的に付き合わされている状態だ。いくら母国とはいえ、意味もなく日本に長期滞在させられる呉羽に対し、ヤヒヤーとしては申し訳ない思いを抱かざるをえず、せめて、充実した学園生活を送ってもらわねば気が済まず——そのための予算としては、ここで三年間暮らすための経費など安いものかもしれない。

実際、日本に帰ってもすることのなかった呉羽に『そういえば、お前は高校中退だったな。』

この際、きちんと卒業したらどうだ？』と持ちかけたのはヤヒヤーの方である。しかし、それをいえば、ナイジェリアでのゴタゴタが一段落した後、行く宛がなくなって、無理矢理ヤヒヤーに付いていったのは呉羽の方だ。今だから、冷静になれるが、当時のヤヒヤーはさぞかし、迷惑だったろう。その辺りを鑑みれば、呉羽とヤヒヤーの貸借関係は、明らかにヤヒヤーの貸

し出し超過だ。照れくさいので、本人の前では絶対に言わないが、

——あたしはヤヒヤーに甘え過ぎだ。

という不安は呉羽の中で常に蹲っている。

……………

「……いかん、何故、あたしは朝っぱらから、あんな髭もじゃオヤジについて考えているのだ……」

せっかく、周囲はぴっちりぴっちりの少女で満ちているのだ。これから、迎えるべき彼女たちとの楽しい楽しい学園生活こそ、呉羽にとって最大の関心事であるべきだ。

ほらほら、通学路の右にも左にも前にも後ろにも可愛い可愛い女の子が一杯ではないか。もう、心を強く保っていないと、うっかりお持ち帰りしてしまいそうではないか。じっくりたっぷり調理して、残さず美味しく頂いてしまいたくはないか。いやいや、せっかく材料が新鮮なのだから、生のままの踊り食いというのも乙である。そうそう、食べ終わった後にあっちこつちに売りに回ってもいい。いやー、最近は薬物汚染とかが酷いけど、その点ここは安心だよ。何せ、産地が天下の埜窟学園高等部だもん。きつと、高く売れる……」

「……………」

とりあえず、呉羽は拳を固めて、隣を併走している塀に叩きつけた。十分に体重の乗った拳撃だった。しかし、さすがに不壊金城の壁は頑丈である。体重が乗っている分、呉羽の拳に負荷がかかり、手の甲は血塗れになり、頭の中を痛みが駆け巡る。もつとも、出血はともかく、激痛は呉羽の望んだものだった。これぐらいの刺激で、己の邪念を打ちのめさねば、取り返しのつかないことになる……。

——あ、あたしは一体、何を考えていたんだ……！

な、なんという汚れた発想をしてしまったのか……。脳が何かどす黒いものに犯されているのではないだろうか……。これでは、まるで、下心丸出しの飢えた野郎の発想ではないか……。少なくとも、乙女の発想ではない。あたしは乙女なのに……。何故だ。どうして、乙女なのに乙女らしい発想が出てこないのだろうか。どこだっ、おとなしく出て来いっ、あたしの中の乙女っ……。と、心中で叫んでも乙女っぽい感情は出てこない。ひよっとして、あたしの中の乙女って、どこか、遠いところに行ってしまったんだらうか？ そうかもしれない。ここ数年、色々と大変だったからなあ。どこかに紛失してしまったのかもしれない。つまりM I Aか、
作戦行動中^{ミツルノチカラ}行方不明なのか……。

「……………」

……と、この辺りで呉羽も己が滑稽さに気付き、とりあえず、大きく深呼吸した。

——ま、まあ。これでここをいる理由ができたかな。

元々、ここを選んだことに大した意味はない。

中学時代、呉羽は優秀な幼馴染に引きずられるように勉強していた。それ故に基礎学力は低

くない。加えて、英語については母語に近い水準で使える。まともに勉強したことの無い古文が入学試験にあったのは驚きで、活用法則などでかなり失点をしたが、現代語訳で挽回できた（ふいりんぐ、というのが呉羽の特技である）。結構不安だった理数系も、受験の過去問題をやってみると、意外に点が取れていた。自分でも訝ったくらいである。もつとも理由はすぐ思い当たった。実は教師免許を持っているヤヒヤーが、今まで暇を見つけては、呉羽に個人授業を強制していたのだ。何かというと『勉強しろ、勉強しろ』と喚くあの頑固親父は実に鬱陶しい。だが、理数系の能力向上はそれに由来していたことに気付いた時、いつもながら、しかし、改めて呉羽はヤヒヤーに心中で感謝したものだ。

で、先に述べたように経済的な問題もほとんどなかった。つまり、呉羽は好きなように高校を選べたのだった。

そして、最終的に呉羽はマンションの一室を埋める入学案内書の中から、望ましい環境と学歴と、わずかな懐古と、ちよつとした好奇心を理由に、この学園を選んだ。ただ今になって思えば、かなり適当な選択だった気がする。『あの超がつくほど保守的なヤヒヤーが男女共学には違和感を示すかもなー』とか、そんな下らない理由が大きな決定材料だったかもしれない。いや、『制服がいいなー、ここ』とか、そんなのが最終判断の動機だった気すらする。

しかし、そんな生温い気分でもいいのだろうか？ 最近ちよつと弛んでいるという自覚はある。ここ数年の反動が出たのだろう。だが、いつまでもそんな気だるい雰囲気を引きずるべきではない。ここらで、一度、シャキッと精神を引き締めた方がよい。そのためには適切な目標を設定するのが妥当だろう。

——よし、最低成功条件は『つつがない学園生活の完遂』、マンション・サクセス目標達成条件は『その中のM I Aの乙女の回収』！

天々たる乙女の一人として、美しい校門の下、呉羽は決意する。

——さあ、気合入れて頑張ろう！

「げろげろー」

「何だ、それは……？」

マンションに帰ってきた途端、呉羽は奇妙な声を上げる。そして、ボタンとヤヒヤーの前に倒れこんだ。

「友達がね、できないの……」

「そうか」

せっかく深刻な声を出してみたのに、卓上端末に向かっているヤヒヤーはただ相槌を打っただけだった。

「何よー。その態度、この深刻な状況に苦しむ少女に対し、年長者として相応しい助言を与え

ようとは思わないの？」

「今日は入学式だろう。そんなすぐに友人ができるか、たわけ」

「まあ、それはそうなんだけどね……」

たしかに友人がすぐにできるわけもない。中学からの持ち上がり組——内部生組は実に仲良さげに固まっていたが、呉羽たち外部生組は、見知らぬ人間と環境に明らかに萎縮していた。

かつて、公立高志中央高校に入った当時の呉羽たちも、あんな感じだった気がする。しかし、入学式には隣の生徒の顔を見るだけでギクシヤクしていた呉羽たちも、五月明けにはすっかり仲よし集団を形成していた。この私立壜箱学園高等部でも、同じ様に時間が経てば、やはり、同じ様な現象が見られるだろう。特に今回は知り合いがいない外部生たちにも、『知り合いがない』という共通項から、連帯感が芽生え始めていた。だから、意外と友達ができるのは早いかもしれない。しかし……。

「やっぱり、不安なのよ」自慢の制服のまま、呉羽はごろごろと床を転がる。「このまま、友達ができなかったらどうしよかなーってね。特にこういうのは最初が肝心だし」

「ごちゃごちゃと下らんことを……真に友となるべき者とは自ずと惹かれ合うものだ。大体、学校は学業のためにある。友人ができるにこしたことはない。が、できなくてもさほど気にすることはない」

ヤヒヤーの語調が強いものになっていた。多分、この手の愚痴は嫌いなのだろう。

機嫌を損ねてしまったかと呉羽は黙り込んだ。ヤヒヤーも液晶画面に集中したまま、それ以上言葉を繋げようとはしない。

『……そう割り切れるのが強者の強者たる所以なのよね……』

呉羽はそう口に出しかけて、思いとどまる。畢竟、自分は弱い人間なのだ。弱さ故に己が容易く揺らいでしまう。容易く揺らぐ自我しかが持てないから、己の有り様も世界に侵され易い。

強者が世界を侵すものとするなら、弱者とは世界に侵されるものだ。すなわち、強者にとっての世界とは、自らの望む姿に変えていく対象であるが、弱者にとっての世界とは、自らを矯正し、決定付ける冷酷な絶対者である。言ってみれば、世界に対して、自らを主体とするのが強者であり、客体とするのが弱者であるといえる。

今の呉羽とヤヒヤーのやり取りもまさにそうだ。ヤヒヤーは友人を必要ならば作り、さもなくば、いらぬという態度である。

しかし、呉羽は違う。友人はそもそも必要なのだ。一人でいると寂しいし、誰かが愉しそうに話していると羨ましい。それも社交性という点では、健全な証拠かもしれない。だが、裏を返せば、孤独に脅え、集団に埋もれていなければ、安心できないということだ。しかも、それは自分の意思というよりも、抗うことのできない世界の命令なのだ。

かつて、呉羽はそんな自分がとことん嫌になった。あらゆる意味で、強くなりたいと思った。ところが、結局は同じ事を繰り返している。

——ヤヒヤーはこんな悩みとは無縁だろうな。一人で黙々と何かに没頭する方が好きみたいだし。……その癖、あれで意外と友達が多いもんなあ。

床に横たわりながら、同居人である髭もじやオヤジに視線を向ける。

ヤヒヤーは無言で卓上端末に向かっていて。今、彼がやっているのはアラビア語から、英語への、あるいはその逆の翻訳作業。要するに小遣い稼ぎだ。基礎体力を磨く意味も含めて、建設とか、運送とか、その辺りのものも探していたのだが、今のところ、ヤヒヤーは片っ端から、断られている。もつとも、ヤヒヤーは日本語については、読み書きはおろか、聞くのも話すのもろくに出来ない。雇用する側にすれば、当然だろう。

ふと、呉羽はこの部屋の賃貸契約の際に彼を見つめていた大家さんの顔を思い出した。あるいはヤヒヤーが雇われないのはアラブ系への偏見もあるのかもしれない。

「あんたさー、このままさー、部屋に引き籠もっていたらさー、テロリストと疑われるかもよー。まー、あたしらはたしかに……」

「焦ってはいいる。だが、慌ててはいけない」ヤヒヤーは呉羽の言葉を断ち切るように言った。

「とりあえずはこの仕事をきちんとやり遂げる。それが第一だ」

「あつそ。で、その後はどうするの。もう、仕事はありませんー——って、言われたら、どうするのよ」

「別の仕事を探す。その時にはこの国で、一つの仕事をやり遂げたという実績と経験を得ている。次の仕事も見つかりやすいだろう」

「その仕事、探して来たのも、もらってきたのも、あたしじゃん」

「うむ、だから、平行して、日本語学校に通おうと思う」

「つまり、その手続きをあたしにしろと」

「話が早くて助かる」

——『あんた、本当に家族の仇を捜す気あるのかよ?』

今度は喉元まで、言葉が出かかった。が、再び思い止まる。さすがにその一線を踏み越えるのには抵抗があった。

あるいは彼も仇討ちなど既に忘れているのかもしれない。現在、煎餅せんべいをバリバリと齧っているこの男が自分の保護者を気取っていることは、呉羽も承知している。ついでに、その仇が日本にいるという情報を入手したのも、彼の独自経路——つまり、呉羽には確かめようのない情報源——からだ。

つまり、この日本行きは被保護者の中途半端な学歴を気にしたヤヒヤーが、呉羽にちゃんと高校を卒業させてやるために、でっち上げた。そんな可能性もあるのだ。

「そういえば、親御さんにはいつ会いにいくんだ?」

「……え?」

呉羽は言葉を返せなかった。

ヤヒヤーもその反応に怪訝な顔をして、液晶画面から目を離す。

「お前、まさか、親御さんに会わないつもりか？」

「え、いや、だって……さ、ねえ」

横たわったまま曖昧に微笑む呉羽。すると、ヤヒヤーは作成中のファイルを上書き保存し、呉羽の方へ向き直った。

「呉羽、ちょっとそこに座れ」

「は、はい」

簡潔な文言であった。だが、こういう時に呉羽が逆らえた例はない。抗い難い何かに流されるまま、呉羽はヤヒヤーの方を向いて、正座する。そして、「えへへ」と可愛らしく笑ってみた。すると……。

「このっ、親不孝者っ！」

濁すような呉羽の態度に、ヤヒヤーは大声を張り上げる。激昂するというのはこういうのを指すのだろう。

自然と呉羽の身が縮まる。

ヤヒヤーと違い、呉羽の父母はピンピンしている。経済的にも社会的にも、平凡な日本の中流として、静かに穏やかに、そして、『おそろくは』幸せに暮らしている。『おそろくは』と付くのは、呉羽が彼らの下にいた頃は文句なしに幸せな家庭を形成していたのだが……一人娘の呉羽が家出同然で、家を出た（おかしな表現だが、実際そんな感じだった）後、ほぼ絶縁となったからだ。

一応、定期連絡はしている。だから、相互の状況もおおよそ把握している。だが、職業柄、呉羽の状況に対する両親の理解とは、本当に『おおよそ』でしかない。毎日両親と顔を会わせ、たわいもないことで喧嘩をしていたあの頃に比べれば、はるかに深い溝ができてしまった。

しかし、子供がいずれ親元から巣立つのは世の摂理だ。両親の身に何かあったらならんともかく、用もないのに一々親に顔を見せに行く必要はない。

……と、呉羽は考えているのだが、眼前の頑固オヤジには異見があるらしい。そして、時々接触した際に見せる態度を鑑みると、両親の意見はヤヒヤーと同じらしい。

「で、でもさ」呉羽は破れかぶれ言ってみる。「あんまり、親との関係を親密にするとき。逆に迷惑だったりするじゃん」

ヤヒヤーの厳しい表情に変化はなかった。

正直、かなり怖かったが、それでも呉羽は釈明を続ける。

「だから、涙をこらえて、距離を置くのが、真の孝行というものではないのかと思うのです。はい」

呉羽の言葉が終わっても、ヤヒヤーは沈黙のまま鋭い眼差しを崩さなかった。

「……………」

「……………」

……………さつそく、呉羽の全身から嫌な汗が噴き出してきた。

こういう時のヤヒヤーは、目線を合わせているだけで、心身ともに凄まじく消耗する相手だ。

あの幼馴染の父親もそうだったが、この手の頑固オヤジは、沈黙がそのまま威圧になって、対面者を萎縮させる。というか、このオヤジはそういう自分の性質をわかってやっているだろう。

なんつーか、こう、連中が黙って相手の話を聞いているのって、相手がいい加減なことを言っ

て、ぼろを出すのを待っているんだ。で、返す刃の論理で一刀両断するんだ。しかも、そういう時だけ、声を荒げて、ぴしゃりと怒鳴るんで、少しでもやましいところがあると、その論理

の急所を刺し貫かれて、負けになる。こちらも堂々と黙っていれば下手な危険を冒さずに済むが、あの真つ直ぐな眼差しを向けられると、畏怖が焦燥を生んで、何か言わねばならない気にな

ってくる。しかし、それは威厳で論理を圧殺しているに過ぎない。あたしだって、付き合

は長いから、そのくらいはわかっている。ここいらで、少しは反撃しておかないと……。

そう思っ、呉羽は堂々たる態度を取り繕ってみた。

「ならば、何故『館山呉羽』の名で入学手続きをした？」

……はい、その通りです。あたしの言葉はただの口実です。

偽名を使わずに入学手続きをすれば、戸籍を調べられた時、親との関係も明らかになる。それを承知で『館山呉羽』の名を用いたのは、そこまでされる危険はほとんどないと踏んだからだ。そして、ヤヒヤーもそれを止めなかった。

腐っても日本の治安は中々のものだ。たしかに呉羽へ悪意を抱いている輩は中央アフリカや中央アジアの辺りには少なくない。ヤヒヤーなら、これに加え、さらに中東及び東南アジアの方面にも、そういう連中を抱えているだろう。しかし、呉羽にヤヒヤーにしる、日本でそこま

で悪意を抱かれるような覚えはない。海外から、悪意を持った方々がやってくるというこ

とありえるが、可能性としては低い。

時間と予算をかければ、二人の個人情報を探し出せる。覚悟を決めれば、その悪意を呉羽の家族にぶつけることも不可能ではない。が、そこまでする理由もないだろう。呉羽やヤヒヤー

は怨恨の対象たりえるとはいえず、所詮は下っ端だ。大体、軽々しく戸籍を調べるとしてもそ

れ程簡単な話ではない。連中にも他にすべきことは山ほどある。

加えて、それでもなお呉羽の家族が狙われる場合を鑑み、既に幾つかの手を打ち、さらに幾

つかの手を考えてある。最終的に呉羽の家族が危険にさらされる確率は交通事故と大して変わ

らないだろう。

だから、呉羽が今から半日かけて電車を乗り継ぎ、実家に帰って「ただいまー」と言っても、

さほど、不都合はない。

それができないのは要するに呉羽の心の問題だ。有り体に言って『どんな顔をすればいいの

か、わからない』のだ。だからこそ、せっかく日本に帰ってきたというのに、踏ん切りがつかない。

しかし、それではいけないとヤヒヤーは言う。また、呉羽にもそれが正しく思える。なんだからだといって、呉羽はヤヒヤーに全幅の信頼を置いているのだ。彼は多少封建的だが、それ以上に理知的だ。信じられないくらい善良だし、呉羽のことをいつも心配してくれる。おまけに、知識と経験が豊富であり、判断力も優れている。彼の言葉は、耳に逆らうことがしばしばであるが、良薬であることはさらにしばしばだ。きつと、今回もその類だろう。

それに――。

「わかった。でも、今すぐというわけにはいかない。夏休み……三カ月後に長期連休があるから、その時、親に挨拶してくる」

「……………」

「その頃になれば、あたしもあの学校に落ち着けるし、その報告付きで出向いた方が父さん母さん爺さん婆さんも安心できるでしょ？」

呉羽は真剣な表情を造ってみた。勿論、表情だけではない。それは一面としては問題の先送りでもあったが、同時に呉羽の本音でもある。

その誠意が伝わったのだろうか。ヤヒヤーはギロリという擬態語付きの視線で呉羽を汲々とさせたものの、最終的には

「よし。必ず、親御さんに挨拶して来るんだぞ」

と了解してくれた。

重圧から開放された呉羽は盛大に溜め息をつく。ヤヒヤーは再びカタカタと翻訳作業に戻る。とはいえ、まだまだ空気は重い。こういう雰囲気は苦手だった。何とか明るくしようと、呉羽は立ち上って、ニヒヒと笑った。

「あ、ヤヒヤー。あたし、これから、お風呂入るねー。このセーラー服を脱いで、靴下とか、ブラとかも取っ払った挙句に、ショーツまで外して、産まれたまんまの姿になるからねー」

「無駄口を叩く暇があったら、先に宿題をやれ」

ちよつとは動揺してくればいいものを、ヤヒヤーは間髪入れずに呆れた声をあげた。これなら、まだ会ったばかりの頃の『若い娘がなんということ……：：：慎みというものを考える！』という一喝の方がまだ面白い。

「いいか、親御さんを安心させるためにも、下らんことを考えず、きちんと学校に行き、ちゃんと授業を受け、先生方の話を真面目に聞くんだぞ」

しかも、ヤヒヤーは念を押すように同じ事を繰り返す。

ちよつとおかしい――と呉羽は思った。自慢ではないが、ヤヒヤーに叱られた経験は一度や二度ではない。だから、呉羽も彼の手法は把握している。ヤヒヤーの叱り方は先程述べたように、相手の弱みを誘い出した上でピシヤリと一喝するというものである。呉羽の母親のように

グダグダと言葉を繰り返すまねはしない。そんな彼が今日はちよつとしつこい。

「——あのさあ、そんなに勉強をさせたいんなら、あたし、大学にでも通おうか？ これでも、何年か頑張れば、大検……じゃなくて、高卒認定を通ると思うよ」

そういえば、呉羽が高校に行きたいといった時、ヤヒヤーはやけに積極的にそれを応援してくれた。元々、呉羽に『勉強しろ、勉強しろ』と言っていた男であるから、学校に通うことを奨励するのはわかる。しかし、繰り返り言になるが、それなら、高卒認定を受けてもいいのだ。

いや、どちらかといえば、呉羽も元はその心算つもりだったのだ。この高校の制服に心惹かれたのも嘘ではないし、その資料を見ながら、『もう一度高校に通うのも悪くないかもねー』と呟いたもの事実だ。が、その時、呉羽はその選択肢の優先度をかなり下位に置いていた。ぶつちやけた話、半ば冗談だったのである。

ところが、何故か彼はその空窟学園の資料を横からじろじろと眺めた上で、急に深刻な顔をして『そうだな。是非、そうしろ。金はいくらでも出す』と主張し、あれよあれよという間に呉羽を入学へと導いていた。あの手腕は日本語を知らぬとは思えぬ見事さで、気が付いたら、呉羽はこのセーラー服を着ていたといっても過言ではない。

「知識や技能を習うだけなら、高校に固執する必要もないと思うけど……」

「ふん。では、貴様が今高校に通っている理由は何だ？」

「え、えーと、『失われた青春』を取り戻すため……かな？」

答えてから——しまった——と呉羽は焦った。『たわけっ！』と怒鳴られるかと身を構えた。

『教育を受けられるありがたみを何だと思っているのか！』とか言われるかと身を縮めた。いや、むしろ、それを望んでいた。

歳の差もあって、呉羽もヤヒヤーの保護者意識を追認しているところがある。

しかし、自分たちの根本はあくまでも対等な友人であり仲間だ。要するに大人の関係なのだ。それは一方が一方にもたれかかる関係ではない。呉羽にとっては『失われた青春』は価値あるものだが、ヤヒヤーにとってはそうではない。呉羽がヤヒヤーとの共同資金で、学校へ行くのなら、そこでなんらかの知識や技能を修得し、学歴という品質保証を獲得せねばならない。その上で、それらを用いて、ヤヒヤーに貢献せねばならない。投資の常で、本当に役立つ機会があるか否かはわからないが、既に金を払った以上、手に入れられるものは手に入れておかねばならない。あらゆる意味で、呉羽はヤヒヤーのガキではない以上、それが筋のはずである。

……はずであるのだが、何故か、ヤヒヤーはくつくつと笑った。

「『失った青春』をだろ？ 貴様の場合は主体的に放り出したんだから」

本当に何かおかしい——と呉羽は痛感した。

二宮朱乃（このみやあけの）は眠気を抑えるのに必死だった。

高等部に入った直後はそれなりに緊張していたものの、三日も経てば、結局は通算十二年目の学園生活を送っているのだと気付いてしまう。しかも、今は七時間目——授業の締めくくりといえは聞こえはいいが、既に五十分単位の授業を六回も繰り返した後でもある。

つまりは退屈にもなるのだ。

社会科教師のロトリュアキ・オロポリック（オキエク）先生が雄弁に語っている。名前が奇妙なのは彼が東アフリカ系アメリカ人だからだ。そのくせ、英語教師ではなく、何故か社会科教師として、働いている変わり者だった。その変わり者のオロポリック先生は、変わり者らしく現代社会の時間に一神教的な言い回しをした。あるいは元がカトリック系なこの学校に合わせたのかもしれない。

「このように人間は創造主から生まれながらの自由を——無限の可能性を与えられた唯一の存在であるわけだ」

朱乃（あぐび）は欠伸（あくび）とも嘲いともとれる口の動きを嘔み殺した。

——無限の可能性ねえ。

たしかに人間は自由な存在だ。ここで立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくることができる。朱乃にはそれができる。朱乃は人間であり、人間は生まれながらにして、自由な存在だからである。

しかし、自由であるということは責任が付いて回るということだ。

オロポリック先生も「自由という字は【自ら（みづか）に由（よ）って】と書く。つまり、自らに由って、思考し、自らに由って、行動し、自らに由って、責任を取るということだ。まあ、要するに全部自分でやりなさいよというわけだね。ははは」と言っている（オロポリック先生はウケ狙いのようだったが、残念なことに笑った生徒は一人もいなかった）。

つまり、あれだ。朱乃はここで立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくることができると、それを実行した瞬間に『教室から、出て行け』と言われるということだ。教師連中はよく『皆さんと共に勉強していききたいと思います』と宣うが、それは『静かに大人しく席に座って、授業を受けてくれる』皆さんと共に勉強していききたいと思います』ということだ。授業中に立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくる十五のガキと一緒に勉強したいわけではない。

かく言う朱乃自身だって、同意見だ。そりゃ、授業が早く終わってくれればいいと思うことはある。だから、たまには授業中に立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくる同級生を期待したくなる。だが、そんな同級生と一年間付き合いたいかと問われれば、首を横に振る。それは、この教室にいる少女達に共通する心情だろう。

そして、ここで朱乃が立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくったりしたら、『教室から、出て行け』と言われるだけではすまない。

ここは公立中学校ではない。雑誌で紹介されるような『名門お嬢様学校』——すなわち私立
塋窟^{けいこく}学園高等部である。

授業中に立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくる生徒は、よくて、停学、
悪ければ、退学処分になる。

そういった処分を朱乃は冷たいと思わない。男と付き合うなやら、髪を染めるなやら、学力
を落とすなやら、学校の出している要求は多岐にわたる。そして、朱乃達は酔狂でそういう指
示に従っているのではない。皆、卒業証書が欲しいのだ。そういう『こいつは言われたことを
守れますよ。読み書き算盤が一応できますよ』という文字通りの証書が欲しいのだ。そういう
ものがないと、見たことも聞いたこともない初めて会ったばかりの人間を雇うには度胸が必要
になる。そして、そういう度胸のある優良企業は少ない。

無論、そんな証書が要らない程の『確固たる力』があれば、話は別だ。例えば、百万人に買
ってもらえる歌が歌えるとか、庭球^{テニス}で世界順列一桁に入っていると、凄^{サイ}い発明とか発見とか
をして、ノーベル賞でも貰っているとか——もし、朱乃がそんな人間だったら、話は別だ。

そういう力があれば、別にこの卒業証書に頼る必要はない。

が、生憎、朱乃にはその手の持ち合わせがない。だから、証書に頼るしかない。そして、窓
硝子を割りまくる生徒に卒業証書を差し出せば、その卒業証書は価値を落とす。そうなったら、
困る。優良企業にだって、優良企業の都合がある。確固たる持ち合わせのない朱乃を優良企業
が雇う理由はどこにもない。知らない野郎にアハハウフと笑いながら、お酌をしたりすれば、
話は違ってくるだろうが、朱乃はそういう仕事が愉しそうには見えない。だから、私立塋窟学
園高等部卒業証書の価値が落ちてもらっては困る。勿論、知らない男の前で素っ裸になっ
てあんなことやこんなことをすれば、話は別だろうが、朱乃はそういう仕事が愉しそうには思え
ない。

だから、学校の姿勢は正しい。というか、こんなことは当たり前すぎて、今更、言うまでも
ない。第一、ここは私立学校である。だから、学校と生徒の関係は、私的契約によってのみ成
立しており、それこそ、互いに互いを選択する『自由』を持っている。生徒は学校に来ない『自
由』を行使できるし、学校も生徒を来させない『自由』を行使できる。それ故、中等部を卒業
する歳にもなつて、この程度の理屈を理解できない馬鹿は、そもそも、この場に居座る権利を
剥奪されるのだ。

第一、朱乃とて、立ち上がって、大声で喚きまわって、窓硝子を割りまくりたいわけではな
い。

……ではないのだが……。

朱乃は己の三つ編みお下げ髪を弄ぶ。

すると、左斜め前の席で、《仔馬^{ポニーテール}の尻尾》がフサフサと揺れていたのが目に付いた。

勿論、教室に哺乳類奇蹄目がいるわけない。左斜め前の席に座っているのは、日に焼けた髪

を後頭部で高く束ね上げた娘だ。

彼女が社会科教師の「昔、大学の先生がね、自由主義は強者の原理、社会主義は協調の原理と言っていたんだよー。いやあ、僕は深く頷いたねえ」という言説に瞳を爛々と輝かせてはコクコクと頷いていのだ。

そして、彼女がコクコク顔を上下させる度に、髪が《仔馬の尻尾》^{ポニーテール}のようにフサフサ揺れる。すると、周りから、クスクスと忍び笑いが漏れてきた。

どうやら、彼女の首の動きが目立っていたらしい。教師も「^{たちやま}館山さんは熱心だなー」と褒め称える。

そこで、ようやくあの《仔馬の尻尾》^{ポニーテール}は己の有り様に気付いたらしい。彼女はきよろきよろと周りを見渡した後、「あははは」と愛想笑いをして小さくなる。そして、それ以降頷くことはなかった。

——あの外部生、^{たちやま}館山っていうんだ……。

朱乃は他人に興味を抱く方ではない。だがそれでも、持ち上がり組の顔は一通り把握している。その記憶の中に入っていない以上、彼女は外部から受験した生徒なのだろう。そう考えれば、教室の雰囲気から、ちよつと浮いているのも、無理はない。ついでにあの《仔馬の尻尾》^{ポニーテール}には見覚えがある。この前、中等部から通算四年目になる通学路で、すれ違っている。その時、ある事情から、目に留まったのだ。

もつとも、向こうは自分を覚えていないだろうし、こちらも彼女の下の名前までは知らないが……。

朱乃は眠気を抑えながら、暇つぶしに手元の電子辞書を読み続け、何事もなく、その授業を終えた。

終えたのだが、その授業の直後に「おーい、二宮さん」と、社会科教師のオロポリック先生に声をかけられたもので、朱乃はドキリとした。先にも述べたようにこの学校は結構厳しい。欠伸をしたり、電子辞書を読んだりというのが教師によっては叱責の理由足り得るのだ。

「何の御用でしょう？」
なるべく、丁寧に、低く、落ち着いた声を出す。目を細め、口を硬く閉じ、表情も失礼にならない程度に冷たいものにする。どうも、級友たちの様子を見る限り、朱乃がこういう態度を取ると、相手には言い知れぬ恐怖が沸き立つらしい。

十代の小娘に通用したからといって、それが成人男性の社会科教師にも通用するとは限らない。かえって、状況を悪化させることもありうる。が、とりあえずはやってみたし、オロポリック先生が何度か口をパクパクさせたところを見ると多少は効いたらしい。もつとも、それは状況を改善させるまでには至らなかったが……。

社会科教師はわざとらしく一度咳払いをしてから、「ちよいと頼みがあるんだが」

「……………できることでしたら、何なりと…………」

あえて、長めの沈黙の後に言葉を紡いだ。オロポリック先生は背がひよろひよろと伸びた華奢なのっぽで、さほど『男性』を感じさせる類ではない。だが、結局は朱乃が校内で近づきたくない人種には違いない。しかし、そんな彼は

「うん、いやね。この資料集なんだがね」

と、一方的に現代社会の資料集を一冊渡してきた。朱乃は中等部の時に買わされた挿絵が一杯で、分厚いヤツだ。

「……………これ、高等部になっても使うんですか？」

「ああ、予めそれを見越して、中等部にも買ってもらっていたんだ」

ところが、そうすると中等部からの持ち上がり組はいいが、高等部になってから入ってきた外部受験生組がこれを持っていないことになる。しかも、明日の授業で使うから、今日のうちに目を通しておいて貰わないと困る。つまり、今日中にこれをこの学級の外部受験生組に配ってしまわねばならない。

「が、生憎、僕がその事に気付いたのは七時間目終了後でね。慌てて、外部受験生らしき奴らに配り回っていたんだが、何人かは受け取る前に帰っちゃったんだ」

「それって…………」

「ああ、僕の不手際さ」そういって、彼はボリボリと頬をかいた。

この女子高では七時間目終了後は原則掃除の時間だ。その後は部活で、それがなければ、下校である。しかし、掃除は当番制であり、年末の大掃除の時以外は、約半数の者がすぐに部活に向かう（そして、大概は掃除で遅れてくる者のために準備をしておく）。ただ、外部受験生組はまだ入学したばかりなので、倶楽部活動は未だ見学の段階だ。また、部活をやっていない者や用事がある者はさっさと帰ってしまうことも多い。

そして、彼が語るには館山呉羽とやはもう帰ってしまったらしい（この時、初めて朱乃は彼女の下の名を知った）。

何か用事があったのか——ひよつとして、七時間目のあれが恥ずかしくなって、逃げるように帰ったのか？

「で、今から、君にこれを彼女へ届けて欲しい」

「……………よろしければ、理由をお聞かせ願いたいのですが？」

「特にない。だから、断られたら、他の人間に頼むし、それでも駄目なら、仕事が一段楽した後、僕自身が車を走らせることになる」

朱乃が断る口実がないものかと思案していると、彼は印刷された紙の切れ端を差し出した。

「あえて言えば、君は帰宅部だろう。それと、先程調べた住所が比較的近かった。地図で確認したわけではないから、実際の距離は離れているかもしれないがね。で、どうだい？」

その時まで、朱乃はずつとこの申し出を断る口実を探していたといつてもいい。しかし……。
——……あれ？

……しかし、その切れ端に書かれている内容を目にして気が変わった。
「承りましたわ。私も彼女にお近付きするよい機会になるかもしれません」

そう微笑むと、朱乃はすぐさま舘山呉羽の後を追い始めた。

早足で校舎を出て、頭の中の地図と照らし合わせ、舘山呉羽の進路を推測。校外に出たら、滅多にしない全力疾走。視線を左右に動かし、同じセーラー服を着た少女たちに一人一人注意しながら、彼女の通るであろう道を駆け抜ける。

もう、まともに足が動かないという頃になって、朱乃の目は《仔馬の尻尾》^{ポニーテール}を揺らす少女を捉えた。髪を《仔馬の尻尾》^{ポニーテール}にした少女は瑩窟学園高等部の制服を着用しており、その後姿はあの教室で見たものにそっくりだった。

間違いない。舘山呉羽だ。

朱乃は確信すると、すぐに足を緩めた。彼女との距離が開くが構いはしない。そして、ある程度、間が開くと今度は足を速め、彼女とは一定の距離を保つようにする。加えて、こちらの姿は目立たないように人ごみに隠れながら。
要するに尾行を開始したのだ。

それは朱乃なりの下手な尾行である。ここが田舎の田圃道^{たんぼみち}だったら、とつくに朱乃は察知されているであろう。だが、この辺りは郊外とはいえ、まだ街中だ。人通りが多く、視界を遮るものも少なくない。しかも、ここは朱乃の地元だ。たまに見失うくらいの距離をとつても、次の進路を先読みするくらい訳はない。

だから、朱乃にはバレない自信があった。

とはいえ、

——私、何やっているんだろう？

そんな馬鹿馬鹿しさがなくもない。

先ほど目に留まり、オロポリック先生から渡された紙の切れ端にはこう記されていた。

【氏名：舘山呉羽、住所：栃木県宇都宮市開耶町4・3・11】^{さくやまち}

一見すると、なんてことのない住所に見える。たしかに開耶町^{さくやまち}という文言にひっかかる者もいるだろうが、開耶町自体は紛れもなく存在する。朱乃が物心付いた頃に行われた市町村再編の結果誕生した新たな行政区分の一つに過ぎない。

——だが、その住所は偽者だった。

ありえないのだ。4・3・11など。少なくとも、舘山呉羽が開耶町4・3・11に住んでいるはずがない。資料を流し読みするしかない教師ならばともかく、朱乃はすぐにピンときた

(そして、だからこそ、こんなに容易く呉羽が通るはずの道を予見できた)。勿論、朱乃は既に——まあ、単なる書き間違えというところね。

と、理性では妥当な判断を下している。……下してはいるのだが、何故か、そのまま館山呉羽を尾行していた。

どうして、と問われると困る。多分、ここしばらく続く乙女心のもやもやが関連しているのと思われるが——とか、朱乃が色々考えている時に、異変が起きた。

突然、館山呉羽が足を止めたのだ。そして、後ろを——つまりは朱乃のいる方を——振り返る。

彼女の挙動には冷や汗をかいたものの、朱乃は動揺を必死に抑え込んだ。

大丈夫、この人混みだ。館山呉羽がこちらを視認できるわけがない。そもそも、彼女が自分を見ていた時間は、本当にわずかなものでしかない。朱乃の名前と顔が一致しているかどうかも怪しい。真正面から向き合っても、自分を識別できないかもしれない。

加えて、今の朱乃は制服の上に、叔母からのお下がりであるダッフルコートを着込んでいる。

このダッフルコートは学校指定のものではなく、朱乃の私物だった。しかも、叔母が長身だったが故に、朱乃が着込むとかなりだばだばで、その体躯のほとんどを覆ってしまう——つまり、あの今時珍しい制服を完全に包み隠してしまうのだ。彼女はあの制服姿の自分しか知らないのだから、仮に彼女が自分を強く意識していたとしても、印象の違うこの自分を見極められるはずがない。

ありうるとすれば、それは挙動不審に館山呉羽が着目する可能性だろう。だから、泰然としている必要がある。落ち着け。落ち着け。大丈夫だ。落ち着いてさえいれば、彼女が、自分を見極められる道理はない。

すると、何故か館山呉羽はその髪を結っていた飾り布に手を伸ばした。

そして、その布を解く。

朱乃の胸が高鳴った。

日焼けした黒髪を布から解き放ったその行為にではない。零れ落ちた髪が織り成した女の線に心が囚われたのだ。

理由はわからない。が、蜘蛛の糸に絡め取られた——そんな心地にさせられる。その不安が確信じみたものにとって代わったのは、彼女の次の一言だった。

「えーと、教室であたしの右斜め後ろの席に座っている娘、いますか？」

朱乃は今度こそ息を飲んだ。

教室における館山呉羽の座席は朱乃の左斜め前。つまり、名前こそ呼ばれなかったものの、彼女は今、紛れもなく、自分に呼びかけているのだ。

——どうする？

朱乃は焦燥に陥った。言い知れぬ後ろめたさから、つい顔を俯けてしまう。

そのまま、冷や汗を流していると、「あはははっ」という呉羽の乾いた笑いが辺りに響いた。顔を上げると、呉羽はどういうわけか頬を染めていた。そして、

「いやあ、どうもすいません。お騒がせしましたー」

と、空笑いを浮かべて、道行く人々へ彼女は頭を下げ始める。一通りの低頭を終えると、逃げるように走り出した。

冷静に周りを見渡すと、朱乃以外の通行人は皆、呉羽の走り去る後姿を注視していた。

そうだ。自分以外のものにとっては、今の舘山呉羽は『道の真ん中で髪を解いては、いきなり変なことをいう小娘』でしかない。衆目を集めるのは当然のことだ。そして、その視線の嵐に呉羽は耐えられなくなった。だから、呉羽は頭を下げ、その場を立ち去ったというわけだ。

「……あ」

朱乃は己の失態に気付いた。このまま突っ立っていたら、呉羽を見失ってしまうのではないか。

「ちっ……」

舌打ち一つと共に朱乃は駆け出した。当然、朱乃もまた衆目を集めたが、かまいはしなかった。

結局、呉羽が入っていったのは結構値の張りそうな高層マンションだった。自動昇降機エレベーターが設置されているにもかかわらず、彼女はすたすたと元氣よく階段を上っていく。朱乃は

——さほど、上の階に住んでいるわけではないのね。

と、一人で納得し、その階段に足をかける。

……ちなみに呉羽が入っていった3LDKの部屋は十二階にあった。

部屋に戻ってしばらくすると、電子合成音がチリンチリンと呼び鈴を鳴らす。思わず呉羽は制服を脱ぐ手を止めた。

「はいはいはい」

と、軽い足取りで、玄関へ向かう。ヤヒヤーが帰ってくる時間だったが、気配からすると、女の子のようだった。呉羽は人恋しい性格なので、客人は歓迎したい。それが女の子なら、なおのことである。

そう思って、喜び勇んで開錠し、入り口の扉を開けた呉羽であったが……。

「え、え、え、え、え??」

と、顔を丸くした。

扉の前にいたのは呉羽と同じ制服を着込んだ少女だった。見れば、右手には笠窟学園指定の

通学鞆を、左手にはその体軀と比べるとかなり大きなダッフルコートを抱えている。

彼女は一目して、小柄だった。日本の成人女性平均よりもちよつと高い背丈をしているだけの呉羽よりも、頭半分ほどは小さい。

しかも、その小さな少女はゼゼエと荒い息を上げている。

「だ、誰？」

素朴な質問をすると、少女はギロリとこちらを睨んで来る。結構怖い。どうやら、あまり、目つきがいい方ではないようだ。

「失礼ですね。教室でああなたの右斜め後ろの席に座っている者ですよ……」

「え、じゃあ、さっきの気配は、ひよつとして……」

「そんなことよりっ！」

と、突然、少女は大声を上げた。上げた瞬間に少女はけ・け・け・けと咳き込み始める。呉羽があたりふたしたが、何とか息が整ったらしい。こちらをジロリと見つめて、詰問してきた。

「あ、あなたは何故息一つ切らしていないの？」

「え、いや、それはまあ……鍛えているから」

そう答えたところで呉羽は悟った。どうやら、彼女は十二階まで階段を上がってきたらしい。

勿論、自分は頑強さが取り柄なので、汗一つ流さず登ってこられた。しかし、自動昇降機エレベーターに慣れた都会の——それも、おそらくは体育会系ではない少女には辛いだらう。特に、呉羽の後を追ってきたのなら、彼女自身にとっての適切な速度を超えた強行になる。無理が祟るのも当然だった。

……どうして、そんなまねをしたのかはさっぱりだが……。

「え、えーと、二宮朱乃さんだったよね」

呉羽が指摘すると、彼女——おそらく、二宮朱乃はあからさまに訝いぶかしむ。

「……どうして、私の名前を？」

この制服には名札は付いていないのに——と返ってくる前に、呉羽は答える。

「だって、同じ教室で過ごす仲間だもん。顔と名前くらいは覚えておきたいでしょ」

「でも、まだ一週間も経っていないのに。よく暗記できますね」

感心と疑念が入り混じった朱乃に、呉羽は「知恵と努力の成果よ」と胸を張った。

「始業式の日^に教室で集合写真をとったでしょう。実はね、あれを複写して、皆の自己紹介の時に一人一人名前を書き込んでいったの」

これは嘘ではない。また、前の仕事とも関係ない。中学以降、気が付いたら寂しがり屋になっていた呉羽の習性である。

「で、あとはそれを見ながら、一人で復習あるのみ」

すると、そんな呉羽に二宮さんは奇異の目を向けた。「ふうん」とつぶやいた後に「物好きなのね」と付け加える。

小さな体躯のつっけんどんな姿に、呉羽はふと昔を思い出した。具体的には、思春期に入っ
てからの幼馴染と、その頃から、その幼馴染と付き合いだした海内七美うみうちななみの事である。あの二人
には、幾つか共通点があり、それ故に呉羽をのけ者にするくらい親交が深くなる。そして、そ
の共通点の一つが『他人の顔や名前を覚えるのに齷齪あくせくしない』というものだった。

——相手が自分にとって、必要な人間ならば、顔と名前ぐらいは自然に覚える。覚えていな
いのならば、覚える必要もない相手なのだ。

そんな風にあの二人は割り切っていた。多分、この眼前の少女も同じだ。それなら、なるほ
ど、呉羽の行為は不可思議に映るだろう。夜な夜な級友の顔と名前を覚えるためにぶつぶつ言
っていた呉羽を珍獣のように見ていたヤヒヤーと同じく……。

呉羽はしんみりとした。同時に、この二宮朱乃という少女が海内七美と、どこか似ていると
気付いた。勿論、のっぽの七美とは対照的にこの二宮さんは小柄だ。また、あばた肌だった七
美と違って、二宮さんの肌は綺麗なものである。容姿の共通項といえば、せいぜいが、色白な
黄色人種であることぐらいしかない。しかし、それでも、呉羽はついつい脳裏で二人を比べて
しまう。

あえて言えば、その気風が似通っているのだろう。

無論、

——美人度は七美よりも二宮さんの方がはるかに上だけだね。

と、心中で付け加えるのを忘れなかった。美人であるというのはあの学園に通う少女達全般
に共通する特徴であった（ヤヒヤーなら、美人の定義と社会の階層について考えるところだ）。
しかし、二宮さんはその中でも結構上位に入るだろう。

その体躯は小柄で、小動物のような可憐さを漂わせている。呉羽の目測となるが、身長は百
五十センチ以下、体重は四十キロ前後か。当人にも、己が纏う可憐さの自覚があるのかもしれ
ない。その髪は小さく短い三つ編みお下げ——と、やや少女趣味な代物で、両耳の辺りから、
肩甲骨の辺りまで垂れ下がっていた。

が、かけている眼鏡は黝く軽そうな骨組みである。しかも、珪素ではなく、炭素結晶の一括
形成型。その上、その奥にある双眸は大きくせに、どこか、陰鬱で、そして、鋭利だった。
そのため、正面きって相対すると、知的な印象が強い。結構整っている鼻や唇、耳から頬にか
けての線も、幼さを醸し出している類なのに、その切れ長の眉一つで、大人びた印象に塗り替
えている。

——顔立ちの幼さを顔付きの厳しさと覆っている。

と形容することもできる。もつとも、田舎暮らしの長かった呉羽からすると『うわあ。東京
のオンナノコだー』の一言でもいい。たとえ、ここが栃木県であったとしても、北陸出身の呉
羽から見ると、関東は悉く『東京』なのだ。

なお——。

今の彼女は疲労で困憊している。それ故に、普段はまっすぐに伸びているであろう背筋も曲がっており、全体的にかがみがちになっている。その上、二人の間には、確固たる身長差があるため、どうしても、呉羽は二宮さんを上から見下ろす形になってしまう。しかも、塾生園の制服は、セーラーカラーをそのまま結んでタイにする形状を取っている。これは清楚さを引き立てるが、構造的に胸元が見えやすくなってしまふ。その上、今の彼女は運動後の熱気で暑いのか、その危うい胸元をさらにパタパタとしている。つまり、何が言いたいのかというところ……ちらりと下着が見えるのである。

呉羽の視力と思考は一気に充実した。

——黒のブラ付きキャミソールか。スリッパというほど、長くはなく、付いているのはノンワイヤーのソフトブラで、装飾は特になし。アンダーは六十で……さすがにCはないにせよ、Bはある……体格を鑑みれば、大したものね。材質は……。

「……何をじろじろ見ているの」

その一言で、呉羽は自分がついつい覗き込んでしまっていることに気づいた。

乙女ゆえの恥じらいか、彼女は手早く胸元を正している。ついでに、その視線はまるで汚物を見るような色を帯び、その上、その距離は呉羽から半歩遠ざかっていた。

「い、いや」これは十代の少女と接するのは久々だったから、つい魔が差してしまっただけなのだ。呉羽は己に言い聞かせつつ、話を変えてみた。「ところで、本日はどのような用件で？」すると、すうと息を吸い込んでその少女——二宮朱乃は言った。

「それはこっちの台詞よ。あの住所、どうということ？」

言った途端に、館山呉羽の顔は真っ青になった。

——やはり、只の書き間違いではないということね。くす。

実を言うと、朱乃はこの高層マンションの住所を知らない。だが、ここが開耶町4・3・11でないことだけは、はっきりしているのだ。だから、彼女のあからさまな変化に朱乃はちよつとした優越感を覚えた。

「それと、渡したいものがあるから、上がらせてもらえるかしら」

一方的に宣言して、朱乃は足を進める。すると……。

「あああああ、駄目」

と、呉羽が慌てて後ろから抱きつき、その動きを止めに来た。思ったより、強い力だったのだ。朱乃は驚いて、倒れそうになる。すると、今度はその体を支える呉羽の腕ががちりと支えた。先程のこともあり、細いけれども筋肉質な腕の感触が、朱乃は妙な気分させられる。ところが、呉羽は何やら朱乃の足元を見て、安堵のため息をついていた。一瞬『何処、触っている

の?』とか意地悪なことを言ってやろうかとも思った。が、呉羽の表情を目にすると、冗談を言うのも躊躇われた。

その真剣さが伝わってきたからだ。

これまでの呉羽を見る限り、彼女は愛想と愛嬌のある娘だった。一人の時は知らないが、誰かの前に立つときは基本的に『曖昧な笑顔』を浮かべていた。ところが、今や、その頬は引き締まり、冷たい気配すら漂っている。

そして、その怖いくらいの双眸は朱乃の足下に向かっていった。

光の線がある——その正体が細い糸なのだ と理解するには時間がかかった。

「これ何？」

「触っちゃ駄目！」

朱乃が足下の細い糸に手を伸ばそうとした瞬間、呉羽が叫ぶ。

次の瞬間、世界が一転した。

その前後、何が起こったのか、朱乃にはさっぱりわからなかった。いつのまにか、朱乃の右腕は呉羽に片手で捻り上られ、朱乃の身体は呉羽の体重でうつ伏せに這い蹲らされる。不思議なくらいに痛みはない。しかし、それ以上に、細い糸に伸ばそうとした腕がまったく動かなかった。いや、腕だけではない。どういうわけか、指先を曲げることすらできなくなっていた。金縛りという言葉が脳裏に浮かぶ。

「……」

明らかな異常事態だった。朱乃は

——なんだかよくわからないが、逆らわない方がいい。

と判断を下し、四肢から力を抜く。それは呉羽にもすぐ伝わったらしい。彼女は安堵の息をつき、朱乃の身体を開放した。

落ち着いて、立ち上がって、制服を整えると、呉羽が「ご、ごめんね」と言ってきた。朱乃は申し訳ない気分にもなったものの、それ以上に混乱が頭を支配していた。

「……これが危ないの？」

朱乃は指を再びその細い糸に伸ばす。勿論、隣の呉羽からの無言の圧力があるので、一定の距離は空けておく。もともと、呉羽がその気になれば、すぐに朱乃の身体は再び指一本動かせなくなることは、想像に難くない。

「気をつけて。下手すると、指を切り落とすところよ」

「そんな大袈裟な」

「いや、本当だって。人間の首ぐらい、軽くちよん斬れる代物だもん」

「……何それ？」

「んー。CNTの一種なんだって。それで造った繊維で糸を編むとそうなる」

「CNT? 何かの略？」

「えーと、カーボン、カーボン、あれ、なんだっけ？ ほら、炭素原子をごちやごちや弄って、造った……」

「もしかして、カーボン・ナノ・チューブの略？」

「そうそう、それぞれ」

呉羽の同意で、朱乃はその正体と彼女の慌て具合の意味を納得した。カーボン・ナノ・チューブ、『炭素』で構成されている『十億分の一』メートル単位の『筒』。要するにこれは特殊な炭素結晶繊維の硬糸というわけだ。

炭素は親和性が高い原子だ。非常に多様で複雑な化合物を——それこそ、朱乃や呉羽の如きヒト科ヒトすらも——造り出しうる。そして、それは炭素同士のみの結合でも同じであり、このたった一種類の原子のくっ付き方次第で、鉛筆の芯から、金剛石まで出来てしまう。——と、ここまでは小学生でも知っている。

それが一九八〇年代後半に入って、この炭素同士の新しい結合が発見された。しかも、それが少しずつではあるが、量産されるようになった。その上、その新しい同素体は、今までない特性を示しつつあった。実際、朱乃自身がかけている眼鏡の炭素結晶もその一種だ。

そして、その様々な特性の中には、筒状の分子構造をとり、しかも、金剛石並みに硬いというものも含まれている。

多分、この糸はその類のCNTで出来ているのだろう。そして、圧力は面積に反比例して、大きくなっていく。故に、細い糸というものはちよつと力を込めるだけで、大きな圧力を生み出せる。それこそ、少女の細腕でも、簡単に肉を裂き、骨を断つことが出来る筈だ。ただ、普通の物質の強度だと、そんな圧力をかけた時に糸の方が耐えられず千切れてしまう。しかし、常識外れの強度を誇る特殊な炭素結晶繊維の硬糸なら、千切れることもなく、人体を破壊することが出来るはずだ。

「……………」

朱乃は慌てて、指を遠ざけた。

ひやりとした。あと少しで、本当に己の指を切断していたかもしれないのだ。

「だ、大丈夫？」

呉羽は心底心配そうに尋ねてきたので、朱乃は「ええ」と相槌を打った。それでも、呉羽は「本当に？」と、繰り返してくる。朱乃は安心させるために、あえて、明るい声で、好奇心を前面に出した。実際、本物を見るのは初めてだから、興味と関心の対象でもある。

「これが噂のCNT……もう普及しているとは驚きだわ」

「いや、普通の市場には出回っていないと思うよ。糸にしちゃうと切れ味良すぎるから、単価が高いくせに人間の首をちよん斬るぐらいしか使い道ないし。あたしもヤヒヤー経由でしか、見たことないな」

「……………じゃあ、どうして、あなたはこれを持っているの？」

「へ？」

あまりにも当然な朱乃の問いに呉羽はしどろもどろになった。

「そ、それは……………」

「あなたは人間の首をちよん斬るの？ あとは豚の解体ぐらいしか、私には思いつかないのだから？」

「え、えーと」

「……………そもそも、これって、銃刀法とかに引っかけたりしないの？」

「さ、さあ？」

「……………」

「……………」

底知れない沈黙が二人を支配した。朱乃としては呉羽に合理的で合法的な——せめて、職業的犯罪とは無縁な——説明をして欲しいところである。ところが、頼みの綱の呉羽は顔をこれでもかというくらいに青くしている。あの逃走劇でも汗一つかかなかった少女とは思えない滝の如き汗をダクダクと流している。

すると、呉羽がさらに顔色を変えた。

次に、カチリと自動錠が玄関の外側から開錠される音が響く。

最後に「タダイマー」といかにも片言といった『ただいま』の声が続いた。そして、扉が開くと……………

「……………男？」朱乃は思わず独白してしまった。

そう、男が現れたのである。現代社会では服飾における性差は衰退しつつあり、一目したぐらいでは、男女の区別をつけにくかったりすることも少なくない。しかし、朱乃は初見で相手が男であることを確信できた。

何しろ、その顔は半分くらい黒々としたヒゲに覆われており、口髭と顎鬚と頬髯の区別がつかないのだ。あの社会科教師とはわけが違う。いかにも、男性ホルモンがバリバリという感じで、女子校育ちで男性への免疫が薄い（つもり）朱乃には辛いものがあった。

しかも、しかもである。

男は彫りの深い顔立ちをしているのだ。それも、日本人基準ではなく、国際基準で。明らかにモンゴロイドではない。多分、コーカソイドだ。その上、色黒だった。日焼けしたゲルマン人という感じではない。端的に言って『濃い』のだ。多分、アラブ系。さもなくば、ラテン系かインド系である。

朱乃は思わず、

「え、えーと、どちら様でしょうか？」

と、尋ねてしまった。

一方の呉羽は『よりにもよって、こんな時に！』という顔をしている。彼女のこういふところ

ろはわかりやすい。それ故に断言するが、この顔つきは『誰、この人?』というものではない。

男の方も、呉羽ではなく、朱乃の方を凝視していた。呉羽がここに居るのは当然だが、朱乃の存在には困惑していると云わんばかりだ。

ちなみに、朱乃を見下ろしているその男は体格も雄大である。朱乃の目測でも身長は百八十センチを超え、その長身が筋肉で鎧われているのが、服の上からでもはっきりとわかる。貧弱な朱乃など腕の一振りでも吹き飛ばされることは明白で、間近に迫るとどうしてもたじろいでしまう。ところが、体格差だけなら、似たようなはずの呉羽にはその手の緊張はまるでない。

やはり、呉羽と彼は顔見知りであるらしい。

さらに言えば、自動施錠のこの部屋に普通に入ってきたのだから、彼がこの部屋の鍵を持っていると考えるが自然だろう。おまけに、彼の『ただいま』という言葉はこの男の寢床になっているということを示唆している。

そして、呉羽の寢床がここであるのも、ほぼ、間違いない。となると、呉羽とこの男は同居しているということになる。

しかし、男女の同居というのは同棲と極めて近い概念であり、しかも、呉羽は朱乃と同じお嬢様学校に通っているわけで……。

「え、えーと、親戚なの」と、呉羽はあからさまに苦しい説明をする。「そう、親戚。親戚の叔父さんのよ」

「……それにしては随分国際的な容姿をなさっている気が……」

「あはははー。よく言われるのよ。うちの叔父さんはとても日本人離れしているって」
そこで初めて男が口を開いた。

「ワタシノナマエハヤヒヤーイブンザカリーヤートイイマス」

「……………」

「ああっ——というか、アラブ人の血が混じっているのよ。うん、そう、で、向こうで育ったから、日本語もあんまり出来なくて」

「ハーイ、オジヨウサン、イクラ? ワタシ、ジュウマンマデナラダセルヨ」

「……………」

再び漂う底知れない沈黙。

「バフスナっ!」

いきなり呉羽は大声で叫んだ。そして、その『ヤヒヤーイブンザカリーヤー(ヤヒヤー・イブンザカリーヤーか?)』なる男を蹴りつける。蹴り付けられた男は、憤りもあらわに何やら言い返した。それも、先程の呉羽と同じく「レーシユ、レーアシャネンっ!」と朱乃の語学力では片仮名に直すのが精一杯の発音で、だ。

しかし、呉羽は怯むことなく、「インチェフ!」と解説不可能な言葉で、再び言い放つ。そして、烈火の形相で、居間の向こうにある部屋の扉を指指し、さらに「バフスナ・バダワナッシ

「ヤラタっ！」と怒鳴った。

すると彼は泫々と、しかし、ごく自然な動作で件の《糸》を跨いで、靴を脱いだ。そして、逃げるように部屋の奥に引っ込んでいった。

一連のやり取りに呆然としていた朱乃に対し、呉羽はぎこちない笑顔を以って、振り返る。そして、「あははは、ごめんねー。えーと……」の後、汗をダラダラかきながら、口ごもる。どうやら、必死に言い訳を考えているらしい。そう推測した朱乃は普段の冷静さをいち早く取り戻し、先手を打った。

「さっきの英語ではなかったわよね」いくら、早口だったからといってそれ位はわかる。「もしかして、アラビア語？」

「えー、えーと、うん」

呉羽は少し迷ったようだが、結局は肯いた。

「あいつのために弁解しておく……十万云々の話、あれはー」

朱乃はクスリと品よく微笑むと、大きく息を吸い、大きく口を開けた。しかも、英語に切り替えて。

「『This is trendy greetings for Japanese female high school students. ~ ..Probably you taught him such a lie. Because he can not understand Japanese. didn, t you? (これが日本の女子高生の間で流行っている挨拶よ……と、日本語のできない彼にあなたが大嘘を教えたんでしょ?)』」

呉羽の汗がさらに増えた。おそらく、あの男の発言の理由がまったくもって朱乃の推測通りだからであり、今の朱乃の音量ならば、壁の向こうの男にも言葉が届いているであろうからであり、発音などの細かな部分を別にすれば、日本の女子高生は英語で一定の会話ができることを確認したからであり、それはつまり、この後、呉羽はあの男に『何故、嘘を教えた？ それにあの言葉はどういう意味だったのだ？』と詰め寄られることになるからであり……。

「に、二宮さんって、意外と性格悪いね……」

「あら、あなたには及ばないわよ」

朱乃が切り返した瞬間、部屋の奥から、男の怒声が響く。

「KUREHA!! After dinner, I'll demand explanation about the "trendy greetings" that you say!! (呉羽よ……夕食の後、貴様の言う流行の挨拶について説明を求めるからな!)」

呉羽は「あちゃあー」と右手で己の顔を抱える。

ついでだから、朱乃は級友としての発言もしておくことにした。

「……意識していないなら、忠告しておくけれど、うちの学校はその辺り厳しいからね。親戚とはいえ、妙齢の淑女が殿方と二人きりで同居なんて、ばれたら、やばいことになるわよ」尻尾髪の娘の顔は見る見る青ざめていく。だが、朱乃は容赦なく畳み掛ける。

「大体、親戚だと納得させることからして、難しいと思うわ」

「い、言っておくけど、ヤヒヤーとは本当になんでもないからねっ」
「……ふーん」

適当な相槌を打つと、呉羽はますます焦ったらしい。

「いや、真面目な話。あたしは……うん、まあ、純潔とはいえないかもしれないけど、なんとか一応、乙女だから。証拠を見せてもいい」

「……完全無欠に純潔な乙女のあたしからするとその言い回しはかなり微妙だね」

「うー、意地悪ー」

「でも、真面目な話、気をつけた方がいいと思う。あなたが考える彼との仲と、彼の考えるそれが、必ずしも同じものとは限らないから」

朱乃の忠告は真剣なものだったが、呉羽はけらけらと笑い流した。

「それはないね。ヤヒヤーって、かなーり女性不信が根深いからさ。二宮さんが心配しているようなことはありませんよ」

朱乃はなんとなく落ち着かない気分になった。よく考えてみれば、あの男は部屋に引っ込んだまま、出てこようとはしていない。つまり、朱乃と呉羽の会話を邪魔しないようにという配慮なのだろう。そして、呉羽はそんなあの男を信頼しきっているようだ。いや、そもそも、彼女は彼を『ヤヒヤー』と呼び、彼は彼女を『呉羽』と呼んだ。日本人とアラブ人との間で個人名を呼び合う関係というのが、どれほどの意味を持つのかはよくわからない。ただ、はっきりと言えるのは、彼女は自分を『二宮さん』と呼んでいる。

——まあ、会ったばかりの同級生と、同居するほどの仲の相手なら、態度が違うのは当然だろうけどさ……。

……。

「……ちなみに、殿方との同居について、私は学校にご報告させてもらってもかまわないのかしらっ？」

「そ、それは……」

なるべく冷たい声を作って、尋ねると、呉羽は口ごもった。

——この娘、心根は善良ね。くすくす。

朱乃は薄く微笑んだ。舘山呉羽の正体は謎に包まれている。ただ、体力があつて、体術を修めていることは明らかだ。その気になれば、先ほどのように、朱乃を締め上げることも容易いはずだ。しかし、そんな考えは彼女の頭の中に欠片もない。

だから、朱乃は「条件があるわ」と申し出た。

「は、はこ」

傾聴の姿勢をとる呉羽に、朱乃は品よく告げる。

「今後はあなたのことを『呉羽』と呼ばせていただきます。代わりに私のことを『朱乃』と呼び捨てにして下さいな」

呉羽は紅葉の如く頬を色付かせた。

その後、呉羽は居間へと朱乃を誘い、互いのことを——多分、互いに当たり障りのないところから——少しずつ、語り合った。

呉羽としては、十代の女の子とこんなにお喋りすることそのものが久々である。ヤヒヤーのようなオヤジには通じない話をたくさんできて、それだけで舞い上がってしまった。朱乃は呉羽から見ると、何を考えているのか、よくわからないところのある少女だった。端的にいれば、少し感性がズレていた。だから、戸惑わされることもしばしばだった。しかし、それは不快を呼ぶ類のものでもなかった。何より、朱乃の方も呉羽との交流を愉しんでいる気配を見せてくれた。本当に嬉しかった。話していてわかったのだが、朱乃は呉羽に強い興味を抱いているようだ。実際、CNTのことを尋ねてきたり、呉羽の部屋に入れさせてくれないのかと、きわどい事に鋭く突っ込んでくるのは、誤魔化すのが大変だったぐらいである。しかし、CNTの入手経路についてはともかく、呉羽の部屋への入室許可はいずれ与えなくてはなるまい。何故なら、呉羽自身がそれを望みつつあったからだ。とりあえず、早急に彼女に見せられる部屋にするため、大掃除を敢行しようと決意した。

だから、夕飯時になり、「そろそろ、お暇するわ」と朱乃が切り出すまでの時間は呉羽にとって、極めて心地よいものとなっていた。彼女のせいで、ヤヒヤーからの説教が待っているのだとしても、この朱乃という少女と出会えてよかったと思えた。

……唯一の心残りといえば、二宮朱乃が何のために自分をつけてきたのが、最後までよくわからなかったことだ。

なお、朱乃が己の失態に気付いたのは、その帰り道だった。

「……あ、資料集渡すの忘れた」

翌日。

昼休みに呉羽は「一緒にお食事しましょう？」と朱乃に誘われた。

女子高生が女の子の同士の集団で昼食をとるというのは、平凡なことである。が、一度その枠組みから離れた呉羽は、それがいかに貴重な時間であるかが身に沁みている。それだけに呉羽

はホクホク笑顔で、朱乃の後を付いていった。先日まで食事の時もずっと一人だったので、ずっと寂しかったのである。ヤヒヤーには嘲われたが、仲良し集団でわいわい愉しく御飯を食べている隣で、一人飯をかき込む孤独は例えようのないものがある。勿論、気を使って誘ってくれる人も居たが、そういう時はどうしてもぎこちない雰囲気が出てしまう。しかし、今回は違う。まともに付き合い始めて、まだ二日目とはいえ、既に呉羽と朱乃は個人名を呼び捨てにし合う仲だ。共に食事をして然るべき関係だ。これなら、皆の輪に自然に溶け込めるであろう。それに朱乃と共に食事を取る娘たちにも興味がある。

ぶっちゃけた話、呉羽は

——友達、たくさんできるかなあ……。

……という期待を胸いっぱい膨らませていたのだ。

それだけに、朱乃が『煩わしいのは嫌い』で、『そりゃ、持ち上がり組の中には、知り合いもいるけれど、一緒に食事する必要は感じないわね』で『普段？ 普段は本でも読みながら、一人で食べているけれど？』という少女であると知った時、いささか落ち込んだことは否めない。

要するに、呉羽は朱乃と二人っきりで食事をするようになったのだ。そのためにわざわざ教室を出て、廊下を移動中なのだった。

——いやまあ、別にいいんだけどさ。実際、朱乃と話すのは嬉しいから。

呉羽はそう自分に言い聞かせる。だが、一方で、

——でも、どうして、ヤヒヤーといい、七美といい、あの幼馴染といい、あたしの周りって、この手の協調性低めなムツツリ系インテリばかりなんだろう？
という思いが湧き出てくるのを抑えきれなかった。

その手の人間を『根暗』と罵れるほど、呉羽は勇敢でも単純でもない。実際、こういう『根暗』な連中も付き合ってみると意外におもしろいものだ。

が、呉羽自身は体育会系のノリが好きなのだ。皆で騒いでいる集団にいる方が落ち着くのだ。魂の底から肉体労働者なのだ。なのに、どういうわけか、親しくなるのは朱乃みたいな『ちょっと変わった人』が多かった。そのせいか、呉羽自身まで『ちょっと変わった人』に分類されることも多い。

——嫌っていうわけでもないんだけど……。

そんなことを考えていたものの、他にあてがあるわけでもないのに、呉羽は朱乃の後ろを歩いていた。ちなみにこれは比喻ではない。先程鞆を手を持った朱乃は「ここは五月蠅いから」と臆面もなく言い放って、教室を出たのである。行き先は告げられていないし、そもそも、ついて来いとも言われてはいない。しかし、呉羽は朱乃の後を急いで追いかけるを得なかった。

ところが、朱乃は歩いている間、一言も声を出そうとはしない。振り返って、呉羽がちゃん

と付いて来ているのかを確認している気配すらない。

——多分、朱乃にとってはこういう時に『余計なこと』を話さないことは自然なんだろうな……。

だが、呉羽は違う。正直、その沈黙にだんだん気が重くなってきた。

すると、いきなり、朱乃は立ち止まった。ついでに「ここよ」と声を出して腰を下ろした。

呉羽が思わずきよきよと見回してみると、天井はなく、近辺には整備された草木が満ちていたが、周囲は校舎に囲まれていた。

——中庭……なんだよね？

露台バルコニーがあつて、その中に机があつて、椅子がある。おそらく、生徒なら誰でも好きに使つていいのだろう。それを証明するかの如く、朱乃はさっさと座っており、既に弁当箱を開き始めている。

呉羽も慌ててそれに倣う。しかし、あまりに慌てていたので、弁当箱をうっかり取り落としそうになった。一瞬笑われるかとも思ったが、朱乃はクスリともしなかった。

代わりに何やら、一冊の大判書籍を鞆から取り出していた。

それは資料集だった。現代社会のもので、周囲の内部生が使っているのを呉羽も見ることがある。

「先生から、渡してくれと頼まれてね」

そう言つて、朱乃は呉羽に向かつて、その資料集を差し出した。呉羽が「えへへ、ありがとう」と、手を伸ばすと、朱乃はそれをさつと引込め、再び、自分の鞆の中に戻した。

戸惑う呉羽に、朱乃は意地悪な笑みを浮かべる。

「ところで、あなた、去年まで、何をしていたの？」

「……」

いきなり核心を突いてくる辺りに、この少女の聡明さがあるのかもしれない。

仕方がないので、呉羽は入学時に用いた話をそのまま流用することにした。

「じ、実はあたし留学しててさー」

入学手続きを始めてから、気がかりになったのは呉羽の経歴だ。勿論、事実を述べるわけにもいかず、『留学していました』ということにしておいた。経済的、対外的には中の中に当たる家庭のことは正直に——ただし、ここ数年まともに会っていないということだけは伏せて——記し、『留学時代』の中身については濁しに濁して、書き綴っておくと何とか通った。何より、英語がペラペラというのが大きかったのかもしれない。面接でも、各地を得てきた様々な経歴を——勿論、お嬢様学校に相応しい部分を選んで——披露し、最後に『それで、やっぱり、人間には総合的な学習というものが必要と考えまして。それにはこのような環境が最も適していると思ひ、入学を希望しました』と、ひやひやしながら締めくくると、教師陣はいたく感激した様子で、呉羽の入学を約束してくれた(その時、既に筆記試験の結果は出ていたのだろう)。

お嬢様学校は意外と柔軟だった。

——が、果たして、彼女にこの言い訳が通用するのか……？

実際、呉羽の「留学しててさー」の一言に、朱乃は「ふうん」と意味深な相槌を打っていた。彼女が何を考えているのかはよくわからない。面接の際と違って、朱乃には先日の一件がある。どう考えても、『留学』については、素直に納得してくれるとは思えない。かといって、下手に言い繕っても、ぼろが出そうだった。

だから、呉羽は口調だけ変えて、同じ内容の話を繰り返そうかとした。ただ、熟考のために時間稼ぎとして、弁当の中身を啄ばみ始める。

ちなみに、この説明に対して朱乃は

「だから、そんなものを食べているの？」

という微妙な反応を示す。

その時、呉羽はもぐもぐとおにぎりを食っていた。中に梅干を入れ、海苔で巻いておいただけの素朴なものだ。そして、呉羽の昼食はこれと緑茶のみである。何せ米は一度癖になると、やめられなくなるのだ。日本米が手に入りにくい土地を転々としてきた呉羽は、禁断症状を散々味わってきた。だから、この国に戻ってきてからは、毎日ホクホクと白米を炊いている。この昼食についても、同じような動機から作り上げた代物だ。呉羽の料理の腕前はお世辞にも上等とはいえないものの、北陸産コシヒカリの味を引き出しているという点においては自信がある。緑茶の渋味と相成って、噛み締める度に米の甘味が湧き出してくる。

しかし、もう一方の朱乃の弁当の中身はサンドイッチだった。しかも、具の種類は多様であり、朱乃はそれを手で千切っては少しずつ口の中に入れて始めている。

その挙動は実上品に思えた。比べると自分はやはり奇妙なのかもしれない。

「やっぱり……おかしかな？」

感想を口にする、朱乃は「そうでもないわよ」と否定した。

「私は普段昼食の時間を読書の時間と兼ねているから、こういう片手で食べられるものがあるがたいだけ。でも、御飯派の人もそれほど珍しくはないわ。さすがにおにぎりのみの人は珍しいけれどね」

「ううう……やっぱりそうか……」

「それがどうかしたの？」

「いやさあ、あたしってば、ちょっと浮いているからさ」

「その程度で離れていくのなら、友達ではないでしょう。いい振るいかけね」

朱乃は冷酷な一言を放つ。思わず、呉羽は小声で「……その人たちの弱さを支えてあげようとは思ってくれないんだね」と呟いた。

その言葉が耳に届いたのか否かはわからない。しかし、朱乃は眉を顰めて、語りだした。

「気にすることはないわ。ここは元々イジメとかもそんなに酷くないから。そりゃあ、陰口の

一つや二つはあるし、無視されることもある。だけど、殴ったり蹴ったり、あるいは物を隠したり、盗んだりというのはあまりない。一応有名私立だからね。仮にそういうことが続いたら、やった奴は停学や退学。暇つぶしにするには危険が大きすぎるし、それが理解できない馬鹿はそもそも入れない」

淡々と語る朱乃には自嘲の色があった。

「それに監視の目と試験の難しさが酷すぎる。そういうことに精を出している余裕がない。あとすれば、形而上学的な理由に基づく自殺だろうね」

「……」

「大体、私は陰で何を言われようが知ったことないから」

「……」

呉羽はもう一度、周辺を見渡してみる。

よくよく、眼をこらしてみても、この中庭で食事を取っているものはいなかった。

杉の骨組みで作られた露台は機能性においても雰囲気においても好ましい空間だった。椅子は悪くない座り心地だし、机は教室のものより広く、弁当箱を置いて余裕があるつくりになっている。庭園を見れば、桜やら梅やら、欧米風の露台と全力で敵対するような木々が植えてある。しかし、不思議と調和は取れていた。呉羽などには、五月雨の後に生る梅の実を想像させ、今から焼酎と氷砂糖を買い込んでおこうと、女子高生らしからぬ決意をさせる光景だ。それだけでなく、ちょうど今は桜も咲く季節であり、儂げな美しさが辺りを満たしている。

唯一の欠点は気温だが、春先の頃ならば、耐えられぬものではない。

なのに、人がいない。何故か？ 理由は明確だ。

——目立つのだ。

ここは中庭であり、校舎に囲まれている空間である。従って、朱乃や呉羽の位置は屋上や教室からは丸見えになっている。多分、機材さえあれば、素人でも狙撃が可能だろうとか、そういうことを考えてしまうほどに。だから、教室の中から、ふと、外を見ようとした者がいた時、今の自分たちの挙動はしつかりと観察されてしまう。そのため、過度に目立つのを避けたい年頃の少女は、自ずとこの中庭で食事を取ろうとはしなくなる。勿論、例外はある。朱乃がその一人だ。だが、それは例外であり、少数派だ。少数派は少数派というだけで目立つので、まずまず注目を集めてしまう。だから、少女たちは加速度的にこの中庭から離れてしまうのだ。そして、ここまで、人が少なくなると、ただ中庭にいるというだけで、特別な目で見られてしまう。もっとも、この『特別』が『珍奇』というものと紙一重であることは言うまでもない。この辺りは呉羽が通っていたかつての公立学校と大差なかった。

実際、校舎の内側からは中庭の自分たちに向かって、現在進行形で、無数の視線が降り注いでいる。大半は興味本位のものであったが、『珍奇な者たち』を見下す色合いも少なくなかった。もっとも、逆に言えば、ここにいる限り、姿を『視られる』ことはあっても、話を『聞かれ

る』ことはないということになる。盗聴器でも仕掛けられていない限り。だから、読唇術にさえ気を使えば、会話の内容は他に漏れることはない。

ふと、呉羽は気付いた。

「もしかして、人気がないところを選んでくれたの？」

「あら、あなたの留学時代のお話って、そんなに表沙汰にできないようなものかしら？」

朱乃は会心の笑みを隠そうともしない。藪蛇を突いてしまった呉羽は頭を抱えなくなった。

「……じゃあ、どうして、こんなところで食事を？」

「変人だと思われたい」

「え？」

唐突な朱乃の言葉に、呉羽は吃驚^{びっくり}した。しかし、すぐに朱乃は言葉を補う。

「と、思っている方々も少なくないかもしれないわ。特に、教室の向こう側で私のことをクスクス笑っている人たちの中には、『彼女はわざわざ目立つ行為をすることで《個性派》を気取るうとする考えの浅いイタい奴だ』というあたりかしら？ その裏に『こういうことがちゃんとわかっている自分は頭いい人間なのだ』という優越感があるかもしれないし、さらにその裏に『相手の心理を勝手に妄想して役にも立たない優越感を抱いている自分は考えの浅いイタい奴だ』という劣等感があるのかもしれないし、そのまた裏には再び『こういうことがちゃんとわかっている自分は頭いい人間なのだ』という優越感があるのかもしれない。まあ、以降は無限循環でしょうね」

「……随分と難しいことを考えているんだね」

呉羽の言葉は本音だった。だが、朱乃はそれを皮肉として受け取ったようだ。

「ごめんなさい。一方的に捲くし立てちゃって。どうしても、私は無駄なことを考えてしまうの。ここでこんなことを言っている私も、あそこで私たちを嘲っている彼女たちも、そういう点では同類だわ。あなたとは違って」

「どういう意味？」

「そうね……。とりあえず、通学路で自分の学生証を見ながら、ニヤニヤするのは止めといった方がいいと思う。かなり、怪しいから。勿論、いきなり何の罪もない路上の壁に殴りかかるのもね」

そう言って、鋭利な少女は、再び、意地悪く微笑んだ。

勿論、呉羽は頭を抱えなくなった。

下校中、朱乃はしくじったかもしれないと省みた。

明らかに自分は喋り過ぎた。彼女に踏み込みすぎたのだ。

そして、ヒトの手というものはモノを掴むためにある。昔、朱乃は山野で遊んでいる時に、黒い毛虫を枯れたエノコログサネコジヤラシと間違えて、握り締めたことがある。妙にもぞもぞと動くな——と思っっているうちに、チクリと刺されて大変な目にあつた。だが、それはヒトの本能のようなものだろう。棒状のものがあつたら、掴んでみるというのは、ヒトが他の霊長類と同じく木の上で生活していた時からの変わらぬ行動原理なのだ。

だから、呉羽の髪も掴んでみた。それも、ギョツと。

すると、呉羽はその眼を爆ぜんばかりに大きく見開いて、絶叫したのである。

反射的に呉羽の髪から、手を離れた朱乃であつた。が——何を大げさな——という思いもあつた。たしかに女性の髪をいきなり触るといふのは、微妙に禁忌かもしれない。だが、ここは女子校だ。黙っていると、ふざけて、胸とか尻とかまで触ってくる同級生までいるのだ。このくらいは冗談の範疇な気もする。とはいえ、朱乃は一応「ごめん」と謝り、呉羽を落ち着かせた。

しばらくして、呉羽は息を整え、両手を朱乃の両肩に乗せた。

「そういう時は必ず一声かけて。あと、優しく、ね。お願いだから、乱暴にしないで。紳士的に、堪忍して」

呉羽はえらく真剣な顔で哀願してくる。朱乃は妙な嗜虐性をそそられた。

「……えいっ」

「きゃんっ」

「……やあっ」

「ひゃうっ」

朱乃がもう一度、その後ろ髪を掴むと、頬を真っ赤に染めて、呉羽はまた飛び跳ねる。その繰り返しで面白くなって、朱乃は何度も呉羽の後ろ髪を握ったり、離したりした。

「や、やめろって言っているでしょう!!」

顔を真っ赤にして抗議してきた呉羽に、朱乃は品よく微笑んだ。

「今日も、お昼をご一緒しましょうね」